

2011年 8月6日・図書新聞では

証言者、告発者としての詩人像を強調

根本的には決して制御できない原発の複雑に絡み合った問題を冷静に見つめる

武子和幸（詩人）

〈危機管理はないがしろにされた。(略) 被害状況発表の遅れと小出し、虚偽報告、隠蔽などを繰り返した〉。
〈想定外のことを想定することが原発の安全安心にとって大事だ〉。

これは、現在のいつ収束するか分からない福島第一原子力発電所の深刻な事故についての新聞記事からの抜粋ではない。前者は、本書に述べられている2007年7月16日の中越沖地震における柏崎刈羽原発事故に対する著者の東電批判であり、後者は、同事故への福島県知事の国と東電の対応の批判である。つまり、今と同じ指摘や批判が驚くべきことに4年前にすでにされていたのである。

本書は、原発の安全神話の欺瞞、国や東電の隠蔽体質、誘致した原発の交付金が工事終了とともに減少し、さらなる増設を誘致するといった原発と地域の悪循環の関係など原発が抱える問題について、一号炉が稼動した1971年から現在の重大事故に至るまでの40年間、新聞や詩誌に書き綴ったものを収めた詩と散文集であり、遠い地方の話だと思っている私たちへの警告の書である。

著者の若松丈太郎氏は、南相馬市在住で、現在原発難民の詩人である。10基もの原発が立地する土地の周辺でつねに〈背筋に刃物を突きつけられているような感覚〉を抱いて生活しながら、根本的には決して制御できない原発の複雑に絡み合った問題を冷静に見つめる目は厳しく確かである。

巻頭の序詩「みなみ風吹く日」は、1971年以降、安全の大合唱の蔭で起こった臨界事故を含む多くの事故を列挙し、29年後にやっとその隠蔽を認めた東電の体質を告発している詩だが、〈世界の音は絶え(略) 来るべきものをわれわれは見ているか〉という詩行は、現在の悲劇的な状況を幻視していて象徴的である。

そこに私たちが見るのは、巨大な〈ブラックボックス〉のような建造物が立ち並び、その中の目に見えない怪物に何が起っているか私たちは何も知らされない。しかし、何か悪しきことが起こりつつある。そのような緊迫した沈黙が支配している世界である。

著者は、この状況を、実際に訪れたチェルノブイリ原発の惨状と重ね合わせることで論述に厚みを加える。その経験は福島原発が東京から300キロ離れていても30キロ圏内と全く変わらないという認識になり、そのことを想像力と感覚を研ぎ澄まして受け止めるべきだと警告する。また、詩人の役割はことばでそれを告発すべきであると、証言者、告発者としての詩人像を強調し、地元の詩人達が原発をどう表現したかを紹介している。それは本書の大きな魅力のひとつになっている。

〈嫌われ反対される原子力発電所／その内での人々は／囚人以上の暗い影を背負い／全てに反対も肯定もなく意志を殺し／黙々と予定内作業を行う〉。

これは原発内の労務に従事した経験を持つこんおさむの「原子力発電所」の一部分であるが、この戦慄すべき詩行には、人間を囚人以上の非人間的な状況に陥らせる冷酷な原発に対する押し殺した怒りと抗議があり、原子力という神を中心に成り立つ世界の恐るべき構造すら浮かび上がらせている。

その認識は、もっとも人間らしく豊かであったこの土地の縄文文化が屈辱のうちに弥生式文化にとって代わられ、中央集権国家体制へと組み込まれていくなかで、原発は、つねに〈歴史的に国境であったこの地の、これまた新しいフロンティア、何に対峙するためのものか〉という著者の問いにもうかがえる。この土地は、蝦夷に対してもエネルギー問題に対してもつねに中央国家のための防衛線であった。本書の告発、警告の底辺には、そのような状況に歴史的に置かれ続けてきた東北人の静かではあるが激しい怒りがある。

と紹介されています。